

取組実績の概要 【2ページ以内】

本事業はパイロットPの枠組みから、交流学生数の大幅拡大、移動スキームなどを大きく改善した。それに伴う新たな課題にも柔軟に対応しながら、運営組織、学びの体系などで構想調書に記載していない新たな取り組みにも挑んだ。以下に記述の通り、事業目的・内容は計画以上に達成された。

□学生交流の高度化と再構築

【交流規模の拡大】各大学各学年の学生定員:最大20名。2016年度21名、2017年度55名、2018年度69名、2019年度65名(実渡航29名、オンライン36名)、2020年度62名(オンライン)、延べ272名を派遣。2019年度34名、2018年度71名、2019年度75名、2020年度67名(オンライン)、延べ247名を受入。日中韓でプログラム修了生80名を輩出。

【海外学習期間の拡大】2セメスター制の採用。移動キャンパスでは半年毎に中・韓で計2年間現地学習。

【4年間の学びのプロセス】①1年次(派遣前学習)+②③2・3年次(移動キャンパス)+④4年次(卒業準備学習)

①派遣前学習(2016年度～):東アジアについて学ぶCAP専用の演習授業、語学授業、現地実習

②移動キャンパス(2017年度～):

(a)中国・広東外語外貿大学と韓国・東西大学校への日本学生派遣:

現地語による語学授業(中国語・朝鮮語)、日中韓共修の演習授業、各国研究、各国人文学科目

(b)広東外語外貿大学と東西大学校からの中国・韓国学生受入:

レベル別日本語授業、日中韓共修の演習授業、日本研究、本学文学部が開講する人文学科目

(c)一時帰国時の集中講義(夏季・冬季):専門知識、研究スキルの補充を目的とする人文学演習

③移動キャンパス2周目(2018年度～):

(a)広東外語外貿大学と東西大学校への日本学生派遣

現地語による語学授業(中国語・朝鮮語)、日中韓共修の演習授業、各国研究、各国人文学科目、国際インターンシップ

(b)広東外語外貿大学と東西大学校からの中国・韓国学生受入

レベル別日本語授業、日中韓共修の演習授業、日本研究、本学文学部が開講する人文学科目、国際インターンシップ

(c)一時帰国時の集中講義(夏季・冬季):専門知識、研究スキルの補充を目的とする人文学演習

④卒業準備学習(2019年度～):卒業論文執筆、3ヵ国語での卒業論文サマリー執筆

【3大学合同授業】移動キャンパス2周目の日中韓での演習授業を、インターネット遠隔システムでつないで3大学合同で実施。毎学期3回。回毎に使用言語を変え、日中韓トリリンガル授業として運営。

【留学報告会】日中韓CAP生が参加し、移動キャンパスの学びの成果に関する研究発表を実施。年2回開催。学内外の教員、高校生、プログラム修了生、OB・OGも参加。

【ピア・ラーニング、ピア・サポート体制】CAPサポーター制度、本学CAP1回生と本学に留学している中韓CAP2回生とがペアとなって相互学習やイベントを行うタンドム活動による、日中韓学生の相互学習の実施。

□運営体制・教学体制の強化と再構築

【3大学】①3大学合同教職員会議:3大学の教職員が一堂に会して、プログラムの運営課題を議論する。年1回開催。②3大学キャンパスアジア教授会:3大学の教学上の連動、内容強化のために2017年度に新設。修了要件に基づく修了認定、連携授業の開発、学生指導や学習・生活に関する情報共有などを目的とする。年2回開催。③3大学実務者会議:①の議題調整、決定事項の運営調整などについて遠隔会議システムを用いるなどして実施。

【本学】④事務局会議:プログラム運営に関わる教職員が集まり、諸課題の検討、報告、共有などを行う。隔週開催。⑤CAP運営委員会:文学部学部長、副学部長2名(教学、企画・国際担当)、CAP担当教員が構成員となり、プログラム運営を自己点検し、課題や改善点について議論する。年4回開催。⑥科目担当者会議:CAP専用科目・語学科目を担当する教員(非常勤講師を含む)が集まり、各授業の目的・運営方針を協議し、学生の到達度などを共有するため、2017年度に人文学科目も含め拡充。年2回開催。⑦教職員配置:中国・韓国・日本の歴史・文化・言語を専門とし、中国・韓国・アメリカでの留学・教育経験を有する教員3名を増員し、国際的経験が豊富な職員2名が学生対応・留学手続き補助等を担当している。

□プログラムの検証・評価と質保証

①学習効果・学生の成長に関する研究:学内の専門家チームが、2つの研究課題で科研費を獲得して定点観測し論文化。②プログラムの学術的検証:CAP担当教員が高等教育における国際教育プログラムの運営・教育システムに関して分析し論文化。③上記CAP運営委員会での検証。④3大学CAP教員による共同プログラム開発及び分析。⑤学生面談とフィードバック:本学で学ぶ中韓CAP生、中韓で学ぶ本学CAP生にグループ・個人面談を実施し、学生の意見・要望を分析してプログラム運営に反映。⑥ラーニングアグリーメント「プログラムの手引き」作成:4年間の学習体系、人材モデル等を可視化して、学生に配付。⑦多方面での留学効果を可視化する評価システム「BEVI-J」の試験的導入。

□キャリア形成と東アジア人文学科目群

①キャリア形成:「日本と中国・韓国をつなげる仕事セミナー」を実施。留学経験者・留学生対象の海外就職セミナー、プログラム修了生を招いた就職セミナーを実施。新聞社主催子どもキャンプに大学生リーダーとして参加。日中韓3カ国で国際インターンシップを実施。②東アジア人文学科目群:2 Semester制を採用したことで、各大学の既存科目の履修が可能になり、英語科目を含む多様な人文学科目を履修。

□修了生との協力・連携と同窓会組織の整備

①修了生によるキャリア教育への協力。②パイロットP同窓会を母体とした同窓会組織の整備・拡充。

□派遣・受入の環境整備と財源確保

①国際コモンズとCAP専用学生共同研究室の整備。②国際寮、ルームシェアによる日常的な多文化共生空間の提供。③学内長期留学奨学金の支給と外部奨学金の獲得。④国際的学びや海外FD研修に関わる学内支援金の獲得。

□高大連携の進展とプログラム生の確保

①語学既修者対象のA0入試、プレゼンテーション形式の附属校入試を実施。②留学報告会への高校生の参加と研究発表実施(うち1名は2021年度にプログラムに参加)。

□コロナ禍における学びのオンライン化

①学籍異動を伴わない留学スキームの新規開発、②中韓CAP生のオンライン留学の早期実現(2020年度春学期～)、③CAP Language Caféの新設。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

(単位:人)

	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		合計		
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	
計画※	20	0	60	40	80	80	80	80	80	80	320	280	
実績	実際に渡航した学生 (以下「実渡航」)	21	0	55	34	68	71	29	75	0	0	173	180
	自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講した学生 (以下「オンライン」)							37	0	62	67	99	67
	実渡航とオンライン受講を行った学生 (以下「ハイブリッド」)							0	0	0	0	0	0

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

- **【実施体制】3大学協議体の効率化と安定化**：パイロットP以来の「3大学教職員合同会議」でプログラムに関わる意思決定を行い、「実務者会議」で具体的協議を行った。また第2モードでは、「3大学教授会(CAP教授会)」を新設し、プログラムの育成目標を達成するための情報の交換と課題を協議する場とした(2020年度はオンライン実施)。これにより事業運営の効率化と安定性が担保された。
- **【共同プログラムの付加価値】3大学共同修了証の発行**：CAPの修了要件を定め、CAP教授会で修了認定を行った。修了生には3大学の総長・学長の署名が入った「CAMPUS Asia Program 修了証」を授与した。2020年度までに本学だけで25名、3大学合計80名のCAP修了生を輩出した。
- **【教育プログラムの共同開発】日中韓学生合同留学報告会・合同授業**：各学期末に移動キャンパスでの学びの集大成として留学報告会を開催した。日中韓CAP生が研究報告や留学生生活報告等を行い、留学での学びを振り返り、次学期への意欲を高めた。また、3大学の統一的なカリキュラム運用を基盤にして、演習授業の一部を合同でオンライン開催し、教育の面においても高度な連携がなされた。
- **【継続的な質の向上】教職員会議の定期開催・報告集の作成**：本学CAP教職員による会議を隔週で開催し、プログラムの運営について絶えず情報共有と自己点検を行った。年度末には運営状況やイベントなどをまとめた事業報告集を発刊して検証を行った。また、本事業の最終年度には、「キャンパスアジア・プログラム最終報告集」で5年間の内容と実績をまとめた(各報告集はCAPウェブサイトにて公開)。
- **【実施体制】科目担当者会議の新設・定例化**：プログラムの育成目標・教学方針の共有、教員＝学生間の緊密な連携維持といった、学びの質保証の観点から科目担当者会議を新設し、学期毎に定例開催した。コロナ禍への対応としては、オンライン授業への円滑な移行のため、科目担当教員FDを実施するとともに、学生用・教員用の学習ツールマニュアルを日中韓3カ国語で独自に作成し配付した。
- **【学習・生活支援】LMSを活用した学びのプラットフォーム**：本学のLMSであるmanaba+Rにおいて、本学CAP生及び中韓CAP生専用のグループをそれぞれ作成し、学生管理と日常的な全体連絡に活用した。
- **【教育・学習支援】サポーター組織の結成**：中韓CAP生の学習・生活サポートを行う学生団体、CAPサポーターを組織し、歓迎会や各種交流会などの企画・運営を行った。日中韓共修の「CAP演習」を履修し、東アジア人文学の課題についてともに学んだ。なお、サポーター学生のなかには中国・韓国への交換留学にチャレンジする学生も現れ、本プログラムの学内への波及、学生の国際的学びの拡大に寄与した。
- **【学習支援】CAPタンDEM**：2019年度からは、本学CAP1回生と中韓CAP2回生とがペアとなり、相互学習やイベントを行うCAPタンDEMを実施した。これにより、国際交流とピア・ラーニングが促進された。
- **【学習・生活支援】個人・グループ面談の実施**：中韓CAP生全員に対して、CAP教員が中朝言語を用いて学期毎に学習・生活面での不安や要望に関する面談を行った。また、本学CAP生に対しても、随時様々な手段で個別対応を行った。これにより問題の早期発見と解決、プログラムの充実化が図られた。
- **【学生教育】CAP成長の記録**：4年間を通じた学びの振り返りと課題を自己確認させるため、学習状況や課題を「CAP成長の記録」シートに半年毎に記入させ、学習に対する自律性を醸成した。
- **【継続的な質の向上】学術的検証**：言語教育、多文化共修、共生言語学の研究者による複数の科研費研究で多面的に検証・評価を受け、CAP担当教職員と共有した。また、CAPの紹介、学習効果の検討やプログラム評価などをテーマにした論文が複数執筆されるなど、学術的な検証・評価がなされた。
- **【実施体制】コロナ禍における「現地の学び」の継続**：「現地の学び」を継続させるべく、2020年2月初旬から3大学教職員間で協議を重ね、早期から単位授与・認定を可能とするオンライン留学を実現した。本学CAP生は、2020年度春学期は派遣先大学の授業を聴講し、秋学期には派遣先大学のCAP専門科目を受講し、本学において単位授与を行った(2021年度は単位認定を行うオンライン留学へ移行)。中韓CAP生については、2020年度春学期から単位授与を伴うオンライン留学に切り替え、その後も継続している。
- **【実施体制】オンライン授業に対する教員・学生支援**：オンライン授業への円滑な移行のため、2020年3月に、本学CAP専任教員とCAP専用科目担当者を対象にFD研修を実施し、2020年度授業の方針やオンライン講義ツール、中韓CAP生の情報などを共有した。また、学生用・教員用の学習ツールマニュアルを日中韓3カ国語で独自に作成し、オンライン授業の運営に万全を期した。
- **【学習支援】CAP Language Caféのオンライン開設**：2020年度から本学CAP1回生に向けて、語学学習の不安解消や交流機会の提供を目的に教員がCAP Language Caféを毎週開催した。質問受付や中韓CAP生・本学CAP上回生との交流を行い、コロナ禍においてもCAP生としての意識付けと意欲向上がなされた。